



特別展「アンチ・アクション 彼女たち,それぞれの応答と挑戦」関連 こどものイベント

「発見10代語り場：アートって何?！」

- 開催日時：2026年4月29日(水・祝) 10:30～12:00
- 概要 特別展を、ワークシートを活用しながら鑑賞し、抽象表現や作品に込められた工夫への理解を深め、意見交換を行いました。
- 参加者：22名
- 対象：中学生～高校生
- 会場：レクチャールーム、1階展示室

■オリエンテーション

2026年度最初のこどものイベントは、中高生を対象とした鑑賞イベントからスタートしました。

イベントの冒頭では自己紹介を行い、参加者と職員が「名前」と「好きな食べもの」を紹介し合いました。「好きな食べ物」という身近な話題に、思わず笑いが起こる場面もあり、会場は和やかな雰囲気。参加者の緊張も次第にほぐれていきました。



自己紹介の時間

◇参加者の感想

- ・「アンチ・アクション」という言葉を初めて知った。同じ作家でも、使う道具や色使いが全然違っていて、見比べてみるとおもしろいなと感じた。（高1）
- ・今まで抽象的な絵をあまり見たことがなかったけれど、素材や筆のあとなど、よく見るとたくさんの発見があっっておもしろかったです。（高1）
- ・自分以外の人がどう感じて見たのか知れて、とてもよかったです。（高3）
- ・抽象画を鑑賞して深めるのは、少し難しくて苦手だったけど、見かたをお聞きして、自分の感じ方が変わって楽しかったです。このような内容をまたやってほしい。（高2）

■学芸員によるレクチャー、鑑賞

展覧会を担当した江上学芸員から、今回の展覧会名にもなっている"アンチ・アクション"という言葉について、戦後に活動していた日本の女性の作家について、そして抽象絵画の見かたについて、セルフガイドを用いながらわかりやすく解説していただきました。「抽象」と聞くと難しく感じるかもしれませんが「何で描かれているのだろう」と作品のキャプションをみたり、「どの順番で描かれたのだろう」「自分ならどのように描くかな」と想像しながら鑑賞していく方法も紹介されました。参加した中高生は江上学芸員の話に熱心に耳を傾け、メモを取る姿も見られました。

レクチャーの後は、ワークシートを手に展示室へ。参加者はそれぞれ気になる作品を選び、作品を見た第一印象を「きれい」「びっくりした」「ちょっと苦手」などのチェック項目（※以下✓とする）から選び、その理由もあわせて記入しました。展示室では入口付近の作品から、一つひとつじっくりと鑑賞。作品の前で時間をかけて鑑賞する姿や、小声で友人らと感想を共有し合う参加者など、それぞれのペースで作品の世界を味わっていました。レクチャーで紹介された抽象絵画の見方を意識しながら鑑賞する参加者も多く、筆の跡や色の重なり、素材の違いなどにも目を向け、作品をじっくりと観察していました。



学芸員の説明



鑑賞の様子

■語り場（意見交換）

鑑賞後は全員で輪になって座り、参加者が選んだ作品をスクリーンに映し出し、展覧会を見て感じたことや発見したこと、それぞれの感想を全員で共有しました。同じ江見絹子《作品》（1961年、奈良県立美術館蔵）を選んだ参加者も。一人は「黒い色の濃淡で描かれていて、静かで落ち着く」（✓「気になる」「きれい」）、もう一人は「作品のサイズも大きく、深海にいるようで不安な気持ちになった」（✓「ざわざわする」）と話してくれました。同じ作品でも受け取る印象や着目する点は人それぞれ異なることを、参加者全員で実感する機会となりました。

そのほかにも、筆の動きや画面の構成、色合い、光の表現など、作品をじっくり観察したからこそその気づきや意見が数多く発表されました。最後に江上学芸員から、「素材の違いや質感など、実物だからこそ見えるもの、気づけることがたくさんあります。これからも今日のことを思い出しながら作品を鑑賞してほしい」とメッセージが送られ、参加者にとって抽象絵画の新たな見方を学ぶ機会となりました。（小田美沙紀/ エducーター）



参加者のワークシート

□担当学芸員からのコメント

当館では、あまり取り組めていなかった中高生の鑑賞イベント。しかも抽象絵画…。未知数な部分もありつつ、だからこそぜひ実現したい企画でした。幸い当日は、新たな表現に挑むパワー全開の作品たちを、若い感性でそれぞれに楽しんでいただけたようです。みなさんの個性あふれる発言で、どんどん見方が深まる面白さは、とっつきにくそうな抽象だけに、より感じられたかも。SNSで簡単につながれる時代だからこそ、アート好きがリアルで語り合える場を、ぜひ今後も続けてゆければと思います。参加者のみなさま、ありがとうございました。（江上学芸員）